



【五明小学校】

＜第1～6学年：ふるさと五明調べ（オオムラサキの飼育）＞

毎年2月、愛蝶会の方に来ていただき、一緒に学校の裏山でオオムラサキの幼虫を探すところから、活動が始まる。全校児童と教員が、1時間かけてエノキの落ち葉の裏を一枚一枚確認していく。わずか1cm程の大きさの幼虫が、エノキの葉の裏にくっついた状態でじっとしているのだが、毎年見付かるのはわずか2、3匹である。レッドデータブックで準絶滅危惧種となっており、幼虫探しを通して、児童の「貴重な蝶を守っていかなければいけない。」「五明の豊かな自然を守りたい。」という気持ちが高まっている。

5月、エノキの葉が茂ってきた頃、捕まえた幼虫を「オオムラサキハウス」に入れ、育てることとなる。幼虫がくっついていて葉を葉が茂っている枝の根元にセロテープで止め、逃げないようにネットをかぶせる。この作業は、愛蝶会の方の指導の下、毎年6年生が担当している。その様子を全校児童が熱い視線で見守る。幼虫はエノキの葉を食べ、ぐんぐん大きくなる。時々、成長の様子を観察するためネットを外す。「どこにいるかな？」「おらんね。逃げたかな？」とつぶやきながらエノキの枝葉をくまなく探す。「あそこにおった！大きくなってる！」「色が変わってるよ。緑色。」成長につれ姿が変わる様子を見て、生き物への興味・関心や成虫になることへの期待感が高まっていく。上学年の児童になると、「アブラムシが出てきたからテントウムシを捕まえんといかんね。」とテントウムシを校庭で探し、捕まえてきてオオムラサキハウスに放す姿も見られる。毎年行っている活動だからこそ、経験から得た知識を下学年の児童に教えたり、次の活動に生かしたりすることができるようになっている。

6月、サナギになると、枝ごと飼育ケースに入れ、校舎内で観察をする。「まだ蝶にならないかな？」と、児童は心待ちにしていた。2週間ほどで羽化すると、裏山に放す。オオムラサキを育て、自然に放す活動から、児童は、五明地区の豊かな自然を感じ、いつまでもその豊かさを守っていこうとする心情が育っていると感じる。今後も大切に受け継いでいきたい活動である。

